ISSN 2189-7476

森のちゃれんがニュース 2023 夏

北海道博物館
HOKKAIDO MUSEUM

Newsletter vol.32

第20回企画テーマ展
「もっと！あっちこっち湿地～自然と歴史をめぐる旅～」開催

湿原・沼・川・湖・干潟…北海道の豊かな湿地に焦点をあてた展示が北海道博物館に帰ってきました。本展は、2021年夏の特別展『あっちこっち湿地～自然と歴史をめぐる旅～』をリメイクした展示会です。前回は感染症拡大による臨時休館にともない、わずか8日間の開催となってしまいましたが、今回は無事会期を終え、たくさんのお客様に足を運んでいただくことができました。

会場では、湿地で見られる鳥や魚、昆虫や植物、そして今では幻になってしまった生きものたちを紹介したほか、かつては日本最大の湿原であった石狩大湿原の開拓に関連する資料を展示するなど、湿地と人のかかわりについても取り上げました。

足でスイッチを押して生きものの鳴き声を聞いたり、湿地の上を歩く感覚が体験できる「フットオン展示」や、沼に“ハマった”写真が撮れるフォトブースもあり、湿地をもっと（！）身近に感じていただけたのではないかと思います。

（研究職員　吉川佳見）

CONTENTS

2 資料紹介
貝製平玉 ―貝取澗2洞窟遺跡出土―

3 総合展示資料紹介・第４テーマ
かつてのくらしを伝える写真たち

4 研究活動紹介
養蚕業の建築からみる
本州以南とのつながりと北海道らしさ

6 北海道博物館第９回特別展
ユネスコ世界遺産登録記念
北の縄文世界と国宝

7 アイヌ民族文化研究センターだより
アイヌ文化巡回展　美唄市で開催します

8 活動ダイアリー
2023年3月～2023年5月の記録

資料紹介

貝製平玉 ―貝取澗2洞窟遺跡出土―

右代啓視
研究部歴史研究グループ　学芸員

貝製平玉は、ネックレスやブレスレットなどを飾る玉です。この資料は、道南のせたな町大成の貝取澗2洞窟遺跡から出土したものです。北海道博物館（当時：北海道開拓記念館）が1990～1995年にかけ、サハリン州郷土博物館、ハバロフスク州郷土博物館から研究者を招き学術調査を行った成果となる資料の一部です。この洞窟遺跡の調査では、2千数百年前の続縄文前半、恵山文化の人びとが海岸洞窟をどのように利用したかを明らかにしました。また、東北地方の弥生文化後期の人びととの交流もみられました。

その成果の一例として、洞窟内で貝製平玉を製作していたことがわかりました。二枚貝のエゾタマキガイ（*Glycmeris yessoensis*）の殻を素材に、円形に加工し、中央に孔があけられています。この平玉の径は5～6mm、孔の径は3～2mm、重さは0.11gで、とても小さなものです。写真の右から斜めのものがほぼ完成品です。洞窟遺跡では、この貝殻の破片が多くみられ、完全な形状の貝殻はほとんど出土していません。これらを基に製作工程を調べると、荒割（写真上）をして形状を整え、貝殻の内側から孔をあけ、最後に外側から孔を貫通させています。仕上げは、円形に整え磨いて完成、貝殻破片の観察でわかりました。エゾタマキガイの貝殻構造は2層になっており、外層はカルサイト（方解石）、内層はアラゴナイト（霰石）です。外層のカルサイトは比較的に硬く、内層のアラゴナイトは柔い特徴を持っています。硬い外側から孔をあけると、割れてしまいます。恵山文化の人びとは経験的に、その特徴を熟知していたようです。

写真の右下には、ボタン状の玉や別素材の玉があります。この中に、巻貝のスガイ（*Lunella correensis*）の蓋に孔をあけようとしたもの、二枚貝のマガキ（*Crassostrea gigas*）の番部を加工した玉があります。

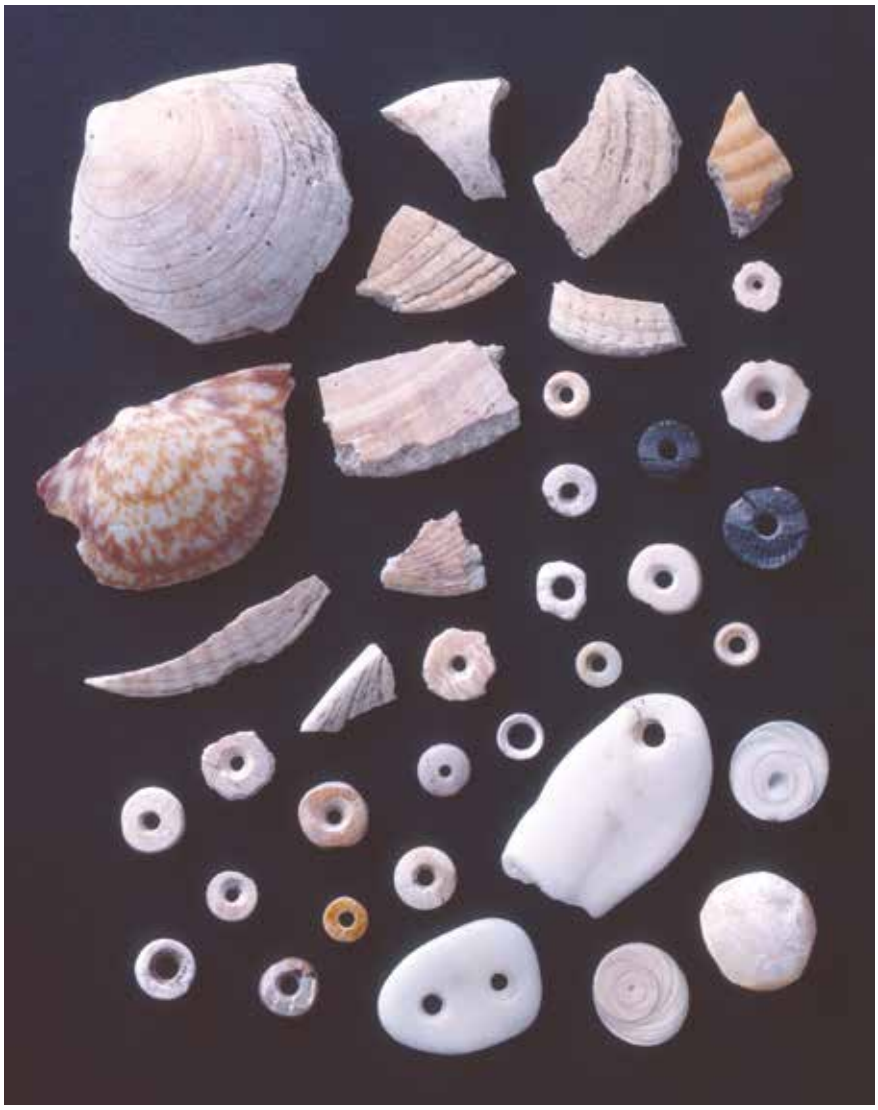


写真　貝取澗2洞窟遺跡から出土した貝製平玉類と素材片（為岡 進氏 撮影）

これらの素材は洞窟の前浜から集めたものと考えられ、このスガイとマガキは現在、暖かい海水域に生息しています。洞窟が利用されていた当時は、現在よりも温暖な環境であったことが読み取れます（弥生海進期に対応）。

貝製平玉は、かつて白く美しく煌びやかな装飾品として加工されたもので、東北地方の弥生文化にもみられ、さらに西日本、朝鮮半島南部にまで拡がりを持ちます。北海道では紀元前後ころ南西域で盛んに作られていました。

この白い貝製平玉に対して、石狩低地帯などを含めた北東域では、赤い琥珀製平玉が盛んに作られていました。代表的な余市町大川遺跡、江別市元江別1遺跡、芦別市滝里遺跡などがあり、数千をこえる琥珀製平玉が出土しています。この琥珀製平玉は、赤く輝いた美しい装飾品です。

この時期、南の白い貝製平玉と、北の赤い琥珀製平玉との異なった装飾品が存在します。異文化と在地文化の脈動を物語る重要な資料です。

【参考文献】
『貝取澗2洞窟遺跡』2001；北海道開拓記念館研究報告，第17号.

＊貝取澗2洞窟遺跡出土の貝製平玉の一部が総合展示で見ることができます。収蔵番号：124556

総合展示資料紹介・第４テーマ

かつてのくらしを伝える写真たち

尾 曲 香 織
研究部生活文化研究グループ　学芸主査

写真1　展示室の様子

今回紹介するのは、天井からつり下がったバナー（写真パネル）です（写真1）。

総合展示室第4テーマは、いわゆる戦前から現在までを対象としています。対象となる時期の始まりが1910年頃で、終わりが2000年頃ですので、その期間はおおよそ90年になります。年数に幅があるので、展示を見に来られたお客様の中でも「懐かしい」と感じるものが一つくらいはあるかもしれません（私はいわゆる初期の写真シールがとても懐かしいです、写真2）。

ここに展示されている写真は、当館の収蔵資料や、スタッフから提供されたものです。写っている内容は歴史的な事件というより、くらしの移り変わりがわかるよう、その時代になるべく多くの人が経験していそうな出来事や風景が選ばれています。

例えばスキーは、パネルの始まり部分（1920年代頃）（写真3）と1930年頃、1950年代頃、そして1980〜90年代の間の計4枚もあります。異なる時代に生きる人たちがそれぞれスキーを楽しんでいた様子がわかるとともに、いつの時代も撮影した人たちにとって残しておきたい時間だったことがうかがえます。

出来事ではなく、時代の流れに着目するのであれば、1940年頃には出征する人たち、そしてそれを見送る人たちといった戦争に関連した写真、そして終戦から1950年代の初め頃は、多くの人が食糧を求め、食糧増産に努めつつ、すぐに米などと交換する、あるいは売って現金とするための魚や野菜を背負い、鉄道なども利用して遠くまで運んだ人々もいました。この頃には、労働の合間に休憩する様子や、魚などを人力あるいは犬ぞりで運ぶ様子（写真4）が選ばれており、実はその頃の空気がなんとなく感じられるように工夫しています。

高度経済成長期に入る頃には、徐々に楽しげな雰囲気の写真が増えていきます。子どもたちのパン食い競争や大人の二人三脚は運動会と思われますが、この頃には学校だけでなく、今は減ってしまった、地域や会社などを挙げての運動会が開催されていました。

また、1960年代の終わりから1970年にかけてはモータリゼーションの進展がわかるような自家用車が走る街の様子が選ばれています。このあたりまでくると、写真そのものもモノクロからカラーへと移り変わっていったことがわかります。

当然ながら、今展示されている時期のくらしを知る人は年々減っていきます。100年前のくらしは、自分たちとはかけ離れているように感じられるかもしれませんが、写真からうかがえる人々の生活にある様々な感情は、時代を超えて共感できるものではないでしょうか。

4テーマをご覧になる際は、ちょっと視線をあげて、この写真たちも見ていただけると幸いです。

写真2　初期の写真シール

写真3　1920年代頃に撮影されたスキーの様子

写真4　犬ぞりで魚行商をしている男性
（関 三雄氏 撮影）

研究活動紹介

養蚕業の建築からみる本州以南とのつながりと北海道らしさ

鈴木明世
研究部博物館研究グループ　研究職員

1994年、東京都生まれ。早稲田大学大学院で修士を取得し、2018年より当館研究職員。専門は建築史。写真は、白川郷で茅を刈り、その束をつくっているところ。

明治8（1875）年、札幌に建てられた「浜益通養蚕室」［写真1］。この建物の写真を初めて見たときの驚きは、今でも覚えています。

◇

私は、学生だった頃に、主に埼玉県から群馬県にかけての農村集落などを対象にして、調査研究を行っていました。この近辺は、「富岡製糸場と絹産業遺産群」として世界遺産に登録されているように、絹蚕業（養蚕、製糸、織物など）が非常に盛んでしたので、調査を行った地域には、住居と蚕室（蚕を育てるための空間）が一つの建物になった養蚕民家が多く、必然的に養蚕についても調べていました。

その世界遺産の構成要素に、「田島弥平旧宅」［写真2］があります。田島弥平（1822-1898）は、明治期以降の近代養蚕業の父とでも呼べる人物で、蚕の繭や卵を安定して生産する手法と、それを実現するための蚕室づくりを自身の住居を用いて実践しました。その特徴として、総二階建ての1階を居室、2階を蚕室にするつくりで、通気のために2階には窓を並べ、屋根の上にもヤグラと呼ばれる天窓をつけることなどが挙げられます。そして、その発明を普及するために、養蚕書として『養蚕新論』（1872年）、『続養蚕新論』（1879年）を刊行するなど、国内の養蚕業の発展に大いに貢献しました。

◇

冒頭の話に戻ります。浜益通養蚕室と田島弥平旧宅を比較してみると、見ての通り非常にそっくりなのです。

詳しい経緯は割愛しますが、『開拓使事業報告第2編』（1885年）の札幌近郊の記載を簡単にまとめると、開拓使は明治4（1871）年から養蚕を奨励し、当時の丘珠村に蚕室をつくり、岩鼻県（現在の群馬県）から養蚕教師を雇い入れています。その後、丘珠村の蚕室は、明治7（1874）年に廃止されますが、翌8年、「…上野国鳥（島）村蚕室を模し札幌浜益通に蚕室属舎各一棟を築き…」（鳥は島の誤記）とあり、現在の札幌市中央区北1条西8丁目付近に浜益通養蚕室がつくられます。島村式蚕室は、田島弥平考案の蚕室のことを指すので、田島弥平とのつながりが見られるのです。さらに、明治9（1876）年には、現在の江別市篠津に篠津太養蚕室［写真3］が建てられます。これも、総二階建てで屋根の上にヤグラが設けられており、その影響が見られます。

実際、この時期に、田島弥平の弟・定邦が養蚕教師として来ており、『続・養蚕新論』の付録として、北海道での養蚕の事業についても語っています。

◇

そもそも、なぜタイトルを「養蚕業の建築からみる…」としたのか、そのことに触れていませんでした。

一般的に、建築は、地域固有の環境や、生活様式、産業などの影響を受け、

写真1　浜益通養蚕室
（北海道大学付属図書館所蔵　資料名：札幌養蚕室／武林盛一）

写真2　田島弥平旧宅（2016年10月撮影）

写真3　篠津太養蚕室
（北海道大学付属図書館所蔵　資料名：石狩郡篠津村養蚕室／武林盛一）

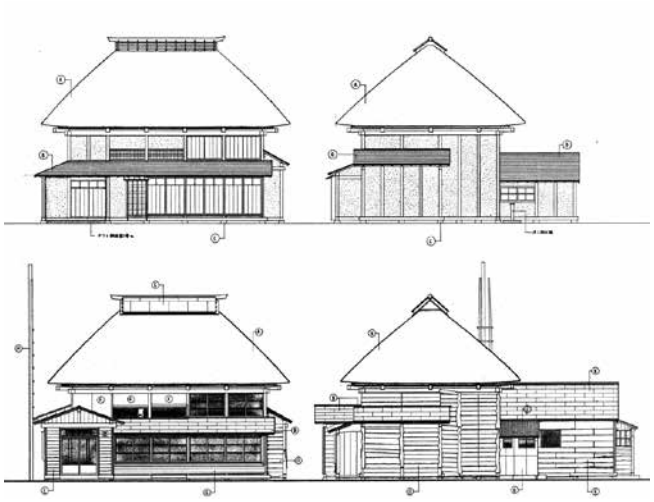


図1　旧菊田家農家住宅の復原図（上）と現況図（下）

写真4　旧山田家養蚕板倉

写真5　旧田村家北誠館蚕種製造所

写真6　旧菊田家農家住宅

その地域らしさが反映される姿形になっていきます。例えば、世界遺産の白川郷も、立地や気候風土、そして養蚕を行うための空間づくりなどの条件を満たしていくことで、かの有名な合掌造りとそれが建ち並ぶ集落の風景がつくられていきました。

また、蚕は非常にデリケートなため、温度や衛生環境などの飼育環境がとても重要視されます。そのため、地域の気候風土に合わせた蚕室をつくる必要があるのです。

つまり、養蚕のための建築には、北海道の気候に合わせた「北海道らしさ」がよく反映されているのではないか、と考えたのです。

◇

そのような視点で今回取り上げた2棟をみてみます。開拓使による『蚕織報文第二次』（1876年）や『蚕織略報』（1881年）の記載から、浜益通養蚕室は島村式蚕室を参考にしつつも、建設の翌年には、蚕室空間に仕切りを設けて部屋を区別したり、その各部屋に炉を設置したりしていたことが分かりました。蚕を育てる春から夏にかけての時期でも夜間に気温が下がり、日中との寒暖差が大きい北海道においては、島村式蚕室の通気の良さが逆に温度調整を難しくしたということが理由になります。また、その経験からか、篠津太養蚕室においては、下見板貼りの外壁に幅の狭い上げ下げ窓が用いられています。これは、開拓使が北海道の気候に適応させるために、アメリカの建築を参考にしてつくられた洋風建築の特徴と合致します。このようにして、本州から取り入れた蚕室を、北海道の気候に合わせて変化させたり、開拓使の建設事業と連動させて洋風仕様にしてみたりと、実験をしていた様子が伺えます。

これらの成果が、その後の蚕室づくりにどのように影響したか、それは今後の課題ですが、現在、開拓使や北海道庁などが刊行した養蚕業に関する書籍等を整理しており、蚕室に関する記述の変化を見出そうと考えています。

◇

さて、実は野外博物館北海道開拓の村にも、養蚕関係の建物が3つあります［写真4、5、6］。開拓の村には、建物が建てられた当初の姿で移築復原されているので、当初の姿（復原図）と移築するまでに増改築された姿（現況図）の比較検討が可能です［図1］。その変化の過程こそが、北海道らしさを見出す重要なポイントだと考えています。引き続き調査を進めていきます。

◇

学生時代の調査研究が、ここまで直接的に現職での研究活動につながってくるとは思ってもいませんでした。養蚕業に関する建築を媒介にして、北海道と本州以南のつながり、そして北海道らしさがつくられる変化の過程を見出していくことが、この先数年間の個人的なテーマです。

※本記事は、科学研究費助成「明治期北海道移住者による農家建築の成立・変容にみる母村文化の影響に関する研究」（19K15199）による研究成果の一部です。

北海道博物館第９回特別展

ユネスコ世界遺産登録記念　北の縄文世界と国宝

令和５（2023）年７月22日（土）～10月１日（日）

鈴 木 琢 也
研究部博物館研究グループ　学芸主幹

2021年、「北海道・北東北の縄文遺跡群」がユネスコ世界遺産に登録され、国内はもちろん、世界からもこの地域の縄文文化に注目が集まっています。

世界各地の先史文化が農耕・牧畜を基盤としたのとは異なり、縄文文化は約1万年にわたって採集・漁労・狩猟を生活の基盤とする定住生活を実現した稀有な文化です。特に北海道と北東北地域には世界遺産に登録された遺跡をはじめ、数多くの縄文遺跡があり、特有の文化が繁栄しました。

本展覧会では、世界に認められた「北海道・北東北の縄文遺跡群」の価値や世界遺産とは何かをわかりやすく紹介します。また、「北の縄文世界」を中心に国宝、重要文化財等を公開し、縄文の心と美に注目して人類の歴史の成り立ちを知るうえで欠くことの出来ない縄文文化の重要性についても考えてみたいと思います。

◆

本展覧会は、次の4つの章で構成しています。その内容を順に紹介していきたいと思います。

1章「縄文ーその心と美ー」

【感じる】をテーマとした本展覧会の導入部にあたります。

土偶、岩偶、土面等の祈りに関係した道具、精緻な文様が施された土器などを通して、縄文時代の人々の心や美を体感してもらうとともに、縄文文化とはどのような文化であったのかを紹介する章としています（写真1～4）。

◆

2章「世界遺産　北海道・北東北の縄文遺跡群の価値」

【知る】をテーマとして、その顕著な普遍的価値を紹介する章です。

「北海道・北東北の縄文遺跡群」の価値は、北東アジアにおいて長期間継続した採集・漁労・狩猟による定住の開始、発展、成熟の過程及び精神文化の発達をよく表していることです。このことに注目して、世界遺産に登録された構成資産17遺跡と関連資産2遺跡、これらの遺跡から出土した遺物群を紹介し、農耕以前の人類の生活のあり方と精緻で複雑な精神文化の変遷を、より深く理解していただけるように展示を構成しています（写真5～8）。

◆

3章「世界遺産とは」

【学ぶ】をテーマとして世界遺産条約とその意義、そのなかでの「北海道・北東北の縄文遺跡群」の現代的な意義を紹介する章になっています。

世界遺産条約は、地球上にある様々な地域の文化や自然など、多様な価値観を国家間で認め合い、相互の理解を深め合うことで国際社会の平和の実現に貢献するということを目的としています。この世界遺産の理念などを映像やパネルで紹介します。また、1万年以上にわたり自然と共生しながら持続可能な定住生活を実現した縄文文化のもつ知恵や、縄文遺跡群が現代社会にもたらす意義についても考えます。

◆

4章「縄文文化を未来へ」

【伝える】をテーマとして「北海道・北東北の縄文遺跡群」、さらには縄文文化を未来へ伝えていく活動を紹介する章になっています。

縄文遺跡群は、発掘してその全体像を明らかにする人、出土した遺物を整理する人、普及・保全活動を行う人たちによって支えられていて、これには多くの地域の方々が参加しています。また、「縄文文化が好き」という気持ちを共有する人たちでサークルをつくり、縄文グッズの製作やイベントを行い、仲間を増やす動きもあります。この章では、このような人々へのインタビューをもとに、その活動等を紹介し、今後の縄文遺跡群の保全と活用のあり方について考えます。

◆

この展覧会を通じて、縄文文化の魅力を体感していただければと思います。また、世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」を守り、後世に伝えていくことの意義を考えるきっかけになれば幸いです。

1：中空土偶（函館市）、2：遮光器土偶（青森県八戸市）、3：漆塗り壺型土器（青森県つがる市）、4：漆塗り注口土器（八雲町）、5：皿形土器（青森県八戸市）、6：匙型製品（骨角製、伊達市）、7：大珠（ヒスイ製、洞爺湖町）、8：装飾突起をもつ台付深鉢形土器（秋田県鹿角市）

アイヌ民族文化研究センターだより

アイヌ文化巡回展　美唄市で開催します

当館が毎年道内各地で開催している「アイヌ文化巡回展」。

この夏も「地名」をテーマに、アイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三（ひでぞう）氏（1899〜1992）の資料を紹介する内容で、美唄市で開催します。

＊　＊　＊　＊　＊

これは、美唄市郷土史料館の企画展「アイヌ語地名を歩く　ー山田秀三の地名研究からー」を、当館との共催で北海道博物館の第14回アイヌ文化巡回展としても開催するものです。

山田秀三氏が行った地名調査の方法などについて紹介するほか、山田秀三氏の地名調査資料としては、1988（昭和63）年6月に「主目的は、今迄意味不明で気にかかっていた産化美唄（旧名sanke-pipai）の姿を見ること」として行った地名調査のときの記録を中心に、美唄市の周辺の地名調査記録も含めて展示します。

また、山田秀三氏の地名調査の方法について、産化美唄川などの「サン」「サンケ」に関する調査と考察を実例として取り上げながら紹介する予定です。

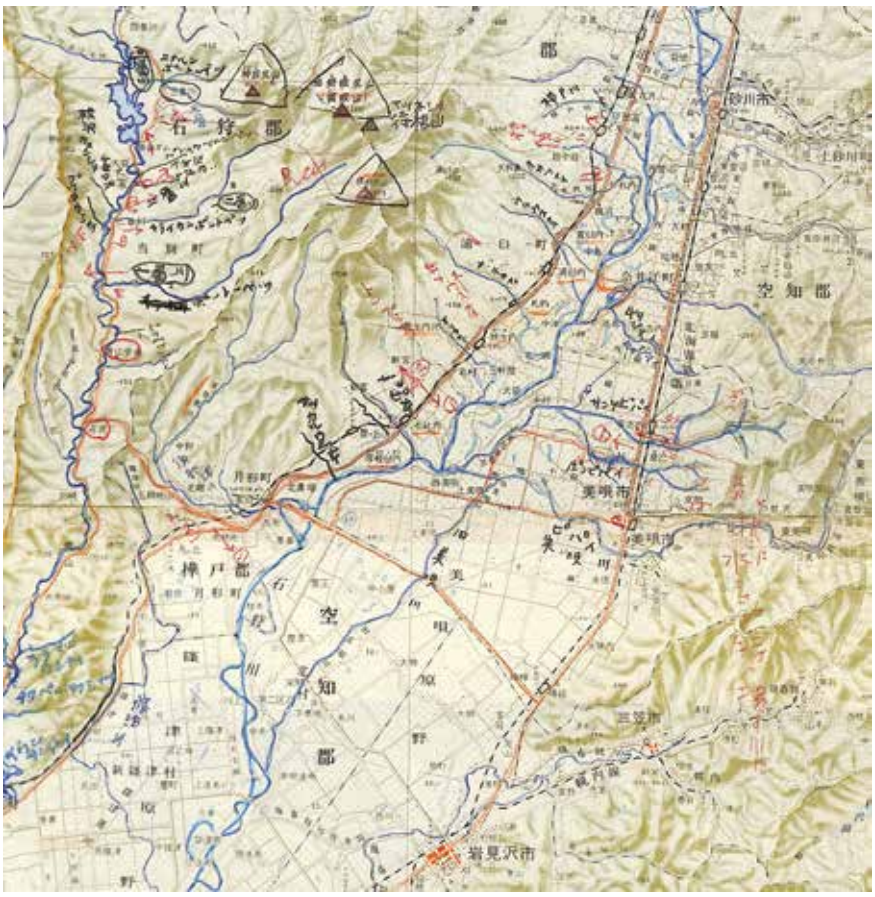
なお、このときの調査記録のなかには、「美唄の街で郷土資料館を訪れ」たという記述が見られ、山田秀三氏がまさに今回の巡回展の会場である美唄市立郷土史料館も訪れていたことがわかっています。

＊　＊　＊　＊　＊

約2か月に及ぶ会期中には、展示会に関連した講座も企画しています。

夏休みにお出かけの際には、お立ち寄りいただければ幸いです。

1988（昭和63）年6月に、山田秀三氏が地名調査を行ったときの記録をまとめたファイルから、産化美唄川のページ。



山田秀三氏の資料から。1988（昭和63）年6月、美唄周辺の地名調査を行った際に用いた地図（一部）。

■第14回アイヌ文化巡回展、
美唄市郷土史料館　企画展
「アイヌ語地名を歩く
ー山田秀三のアイヌ語研究からー」

会期：令和5（2023）年7月7日（金）から
9月3日（日）まで
会場：美唄市郷土史料館
1階特別展示室
（美唄市西2条南1丁目2番1号）
開館時間：9:00〜17:00
休館日：月・火曜日

■関連行事（記念講演会）
「明治前半期の石狩川中・下流域における
アイヌのくらし」
日時：8月19日（土）13:30〜15:00
講師：大坂拓
コメンテーター：谷本晃久氏
（北海道大学）
会場：美唄市郷土史料館2階
視聴覚ライブラリー

（アイヌ民族文化研究センター
遠藤志保）

活動ダイアリー

2023年3月～2023年5月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

3月4日（土）
■自然観察会「動物の痕跡をさがそう」を開催。担当：表渓太・堀繁久・水島未記・鈴木あすみ、自然ふれあい交流館スタッフ。
3月4日（土）
■はじめての古文書講座⑥を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。
3月5日（日）
■企画テーマ展関連　ミュージアムカレッジ「ウトナイ湖・勇払原野の野鳥と自然」を開催。講師：稲葉一将氏（公財　日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリ）、江崎逸郎氏（苫小牧市美術博物館）。
3月11日（土）
■はじめての古文書講座⑦を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。
3月12日（日）
■特別イベント「クマゲラ一斉調査2023」を開催。主催：野幌森林公園を守る会、共催：北海道博物館。担当：水島未記。
3月16日（木）
■令和4年度第2回北海道立総合博物館協議会を開催。
3月19日（日）
■企画テーマ展関連　子どもワークショップ「巨大すごろくでスリル満点！　わたり鳥の旅」を開催。担当：表渓太。**［写真1］**
3月25日（土）
■はじめての古文書講座⑧を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。
3月28日（火）
■森のちゃれんがニュース2023春号（Vol.31）を刊行。
3月28日（火）
■北海道博物館研究紀要第8号、北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要第8号を刊行。
3月30日（木）
■北海道開拓の村旧小樽新聞社と旧近藤染舗の再公開にかかる報道向け現場説明会を開催。**［写真2］**
4月14日（金）
■総合展示室クローズアップ展示①～⑦を展示入替。
①描かれたアイヌ民族のサケ漁
—小玉貞晨筆『蝦夷国漁場風俗図巻』—
②新選組の元幹部隊士　永倉新八
③アイヌ語学習教材のいろいろ
④北海道博物館が収蔵するトンコリ（五弦琴）
⑤岩手県から北海道へ渡った神楽
⑥たくぎん（北海道拓殖銀行）
⑦野幌森林公園の植物を調べる
4月15日（土）
■自然観察会「エゾアカガエルのラブコールを聴こう」を開催。担当：水島未記・表渓太・堀繁久、自然ふれあい交流館スタッフ。
4月16日（日）
■特別イベント「博物館のウラ側を見てみよう」を開催。担当：鈴木琢也・櫻井万里子・高橋佳久・鈴木明世・鈴木あすみ・山際秀紀。**［写真3］**
4月22日（土）
■アイヌ語講座「アイヌ語ブロックでアイヌ語を学ぼう①」を開催。担当：吉川佳見。
4月26日（水）
■館内定例研究報告会を開催。発表者：各研究代表者。
4月28日（金）
■地質の日関連展示「ベンジャミン・スミス・ライマンたちの業績」を開催（5月31日（水）まで）。**［写真4］**
4月29日（土･祝）
■企画テーマ展関連　ミュージアムカレッジ「馬が湿地ではいた靴」を開催。担当：山際秀紀。
4月29日（土･祝）、5月3日（水･祝）～5日（金･祝）
■屋上スカイビュー特別開放
5月4日（木・祝）
■特別イベント「上映会　ショートムービー「建物に描かれた想い」」を開催。担当：鈴木明世。
5月5日（金・祝）
■特別イベント「石の中からホンモノの化石を掘りだしてみよう！」を開催。講師：北海道化石会会員。担当：圓谷昂史・久保見幸・成田敦史。
5月6日（土）
■はっけんイベント「飛ぶフクロウをつくろう！」を開催（5・6月の祝日を除く土・日）。
5月6日（土）
■ちゃれんが古文書クラブ①を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。
5月13日（土）
■アイヌ語講座「アイヌ語ブロックでアイヌ語を学ぼう②」を開催。担当：吉川佳見。
5月14日（日）
■企画テーマ展関連　ミュージアムカレッジ「札幌にもいた!?　カワウソのお話」を開催。講師：山田伸一氏（札幌学院大学）、担当：表渓太。
5月21日（日）
■企画テーマ展関連　講演会「湿原の自然誌と変遷」を開催。講師：冨士田裕子氏（北海道大学名誉教授）。
5月27日（土）
■ちゃれんが古文書クラブ②を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。
5月28日（日）
■ミュージアムカレッジ「じっくり聴こう！　アイヌの音楽「神謡」の旋律」を開催。担当：甲地利恵。
5月28日（日）
■第20回企画テーマ展「もっと！あっちこっち湿地」閉会。
5月31日（水）
■館内定例研究報告会を開催。発表者：石子智康。

写真1

写真2

写真3

写真4

人事異動

〈　〉は前職

退職（3月31日付）　〈総務部企画グループ兼アイヌ民族文化研究センター研究主幹〉甲地利恵
新任（4月1日付）　総務部総括グループ主事：田口ことり、学芸部博物館基盤グループ兼研究部歴史研究グループ学芸員：石子智康
内部異動（4月1日付）　総務部企画グループ兼生活文化研究グループ学芸主幹：会田理人、総務部企画グループ兼アイヌ民族文化研究センター研究主査：遠藤志保、総務部企画グループ兼研究部自然研究グループ学芸員：成田敦史、学芸部博物館基盤グループ兼研究部生活文化研究グループ学芸主査：青柳かつら、学芸部博物館基盤グループ兼アイヌ民族文化研究センター学芸主査：大坂拓、学芸部博物館基盤グループ兼研究部歴史研究グループ学芸員：田中祐未、学芸部道民サービスグループ兼研究部自然研究グループ学芸主査：圓谷昂史、学芸部道民サービスグループ兼研究部博物館研究グループ学芸員：鈴木あすみ、学芸部道民サービスグループ兼アイヌ民族文化研究センター研究職員：吉川佳見、学芸部研究戦略グループ兼研究部歴史研究グループ学芸主査：東俊佑
再任用（4月1日付）　学芸部道民サービスグループ兼アイヌ民族文化研究センター研究職員：甲地利恵
転出（5月31日付）　〈総務部総括グループ主事〉田口ことり

来館者数

○2023年3月
総合展示室　5,113人　特別展示室　5,516人　はっけん広場　55人
○2022年度合計
総合展示室　124,391人　特別展示室　82,385人　はっけん広場　102人
○2023年4月～5月
総合展示室　10,964人　特別展示室　10,340人　はっけん広場　233人
○累計（2015年4月～2023年5月）
総合展示室　730,973人　特別展示室　525,453人　はっけん広場　121,117人

森のちゃれんがニュース　第32号

発行日：2023年6月30日
編集・発行：北海道博物館
〒004-0006　札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657
ウェブサイト https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp
©Hokkaido Museum, 2023